慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	海の音から都市の音へ : 都市における騒音の二つのアプローチ
Sub Title	
Author	マネア, ピエール
Publisher	三田社会学会
Publication year	2012
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.17 (2012. 7) ,p.160- 161
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2011年度大会報告要旨
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20120700-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 17 号（2012）

海の音から都市の音へ

― 都市における騒音の二つのアプローチ―

マネア・ピエール

音が溢れている状態における聴覚、社交性はどのように分析すればよいのであろうか。モダンな技術に関して美的・道徳的な偏見が強いサウンドスケープ論（TORIGOE 1982 : 164）によると、都市における多くの音環境は「ローファイ（音の信号が音過密に溺れる状態）」と認識されている。駅構内や車内の音環境も「ローファイ」な音環境と認められてしまうかもしれないが、その区別では駅構内や車内における社会現象を理解することはできない。サウンドスケープ論による「雑音＝公害」と「音楽的な音＝楽しめる音」という区別を乗り越える必要があると思える。そのため、フランスの CRESSON 音環境研究所の科学者たちによって 1970 年代から蓄積されてきた分析枠組みや調査方法を利用したいと考える。社会学者の AUGOYARD 氏等は日常生活のローファイな音環境における聴き方、音環境の生産、音環境の社会現象を対象としている。人類学のレベルにおける最終的な疑問は、公害と見なされている音、そして音楽的な音以外の音はどのように文化的な注意の対象でなくなってきたのであろうか、というものである。

例えば日本やフランスでは、団地に隣接した高速道の永続的な交通騒音の除去が行われたが、そのことによって団地の音環境が必ずしも静か、そして住みやすくなるわけではない。実は、こうした防音対策によって、朝早くラジオを聴いたりする人、犬がうるさい上の部屋、下の中庭にいる若者の音活動等、要するに隣の人の音習慣を発見するきっかけにもなった。その時まで高速道の雑音に隠されていた様々な音が前景に戻る。しかし、交通機関と異なり、受動的な騒音公害ではなく、前景に戻るのは（ここは LEFEBVRE が『空間の生産』で取り上げた概念を転用する）社会空間の生産、そして隣の廊下の人とのコミュニケーション問題を出現させる社会的に能動的な音である。こうして、日常生活のアーバン音環境の雑音を十分考慮せずに処理すると、日常のバランスを崩すおそれがあることが分かった。サウンドスケープ概念によれば、交通騒音は確かに雑音であるが、それと同時に、間近な深いな環境や、建て方が不良な住宅の不快を中和することで、ポジティブなマスキング効果も生じていた。

CRESSON（音環境研究所）の研究者たちはその場（in situ）の雑音を研究することにより、

音環境の豊かさを認めるポジティブな論理で、音響生態学のアプローチに近い。しかしながら、音の風景の質的な区別はされない。

それらの研究から特定された雑音の機能の中の二つを見てみよう。

作業の音量が大変高い建築現場では、仕事自体の効率には共通な時間と空間が必要である。雑音は（ヤコブソンが説明した）交話的なコミュニケーション手段となり、作業現場としての共同的な空間を作る（JAKOBSON 1994 : 68）。「叫び、衝突、摩擦等は無計画に発生しない」（AUGOYARD 2003 : 31-32）。建築現場において、交話的な機能を果たすのは、雑音であり、社会的な接触の素材である。

雑音はコミュニケーションの行為の距離・方向・限界の管理」をしやすくする。また団地の例に戻ろう。ある女性が地面から８階にいる弟を呼ぶことを観察したことがある。団地の何棟かの建物の特別な建築様式による響き音効果が強く、その上、団地の周辺に高速道路の交通騒音もあるので、雑音の高い地域と言える。しかし、相手が話しの内容が理解できるように、周辺の音環境（特に交通騒音）に話のペースを合わせることがある。それと同時に背景雑音のレベルが非常に高いのに、女性が声をそれほど上げないこともある。それは、関係ない周りの人に話が理解できないようにするためである。ここでは、雑音は利用されている。「情報の本質を隠しながら、社会的な選択性（社会的な分離）を行うのが役目である」（AUGOYARD 1985：122）。この場合、雑音は「多様の意味を持ち、個人を分けたり選択したりし、集団の開放性を管理するものである」（AUGOYARD 2003：39）。ポジティブなマスキング効果の一つの例である。

生態学に限定されたサウンドスケープのアプローチは、ローファイ音環境における複雑な関係、そしてそのローファイ音環境に関する様々な反応を十分に説明することはできない。特に、ローファイ音環境が建築空間、電気信号の音、メディアから来る通信、もしくは社会的・経済的な力としての消費主義に支配されている場合は説明は不可能である。

［文献］

AUGOYARD, Jean-François, 1985, 『音環境と人間コミュニケーション』CNRS.

———, 2003,「社交性を聴く」Espaces et sociétés 『空間と社会』115.

JAKOBSON, Roman, 1994, 『一般言語学』 Éditions de Minuit.

TORIGOE, Keiko, 1982,『A Study of the World Soundscape Project』York University.

（まねあ・ぴえーる　慶應義塾大学大学院社会学研究科）